

一九五〇年六月、朝鮮戦争が起こった。その直後、ワシントンから来た米軍の情報将校、シンプソン大佐から部屋に呼ばれた。行ってみると、「キルロイ

私の履歴書

一 匡 頭 江
いち きょう ぎょう かしら え

⑨

にはって万一のときの保護を地元住民に依頼するためのものだという。同じ内容で紙のビラも、しかも枚数もほう大で、とても短期間ではできない量だ。

しかし、私は総力をあげて印刷を仕上げたうえ、「これまで米軍にはお世話になった。恩返しに」と言って代金は受け取らなかつた。大佐は大変感謝し、日本人には与えられなかつた基地への出入り自由なパスをく

キャンプが作られ、それに伴って仕事も江田島、広島、岩国へと拡大。従業員数は合わせると五百人に膨らんだ。

五〇年、大みそかに基地内で催されるパーティーに、米軍の夫人たちが胸に着ける蘭(らん)のコーサージュに着目した。九州各県から山口までこの花を事前

キャンプ拡大 仕事次々

蓄え元手にパン製造進出

れ、特殊輸入許可業 (SPS) の免許を総司令部から取得する際にすいぶん支援してくれた。SPSは米軍用の物資を自由に輸入できる特殊権益である。免許を取得すると早速、外国車を輸入。五二年一月に米国人専用

のタクシー会社「コスモポリタン・タクシー」を始めた。朝鮮戦争が始まると、朝鮮半島に近い福岡はみぞうの特需景気に沸き返った。次々と米軍キ

ャンプが作られ、それに伴って仕事も江田島、広島、岩国へと拡大。従業員数は合わせると五百人に膨らんだ。五〇年、大みそかに基地内で催されるパーティーに、米軍の夫人たちが胸に着ける蘭(らん)のコーサージュに着目した。九州各県から山口までこの花を事前

でも売り物にならず失敗した。 当時米国の良き時代。米軍将校や家族の物心両面の豊かさ 間に触れるなかで、将来豊かな生活と結びつくような仕事をしたい、という思いが募った。 優れた米国のシステムやマニュアルなど基地での体験が後に飲



パン工場併設のドライブインレストランの前で

なくなる。「今のうちに何か日 本人相手の仕事を始めなければ」と、五二年十二月、福岡市内にロイヤルベーカーリーを設立した。「ロイヤル」と名付けたのは、コスモポリタンと同様、「世界に羽ばたく」とか「王者の風格」といったイメージにながら、英語の単語の中で大変好きな言葉だったからだ。

当時、市販されていたパンは材料の質が悪くてまずかつた。だが、私には基地での仕事を通じて得たノウハウと、SPSのルートで手に入る上質の輸入小麦粉とイーストがある。米国から最新の機械を導入し、交通の便が良い国道沿いに、当時珍しいドライブインレストランを併設した工場を新設した。レストランではハンバーガーからピザまで売って珍しがられた。

ロイヤルのパンは白くておいしいと好評で、百貨店をはじめ、卸売りの販路は拡大。その半面、集金には苦労した。(ロイヤル創業者取締役)

(私の愛称)、米国に協力する気があるなら、今すぐこれを作ってくれ」と紙を見せられた。そこには「この米兵を保護してくれた者には報奨金を渡す」と書かれていた。米国旗と国連旗のデザインを入れ、英語と中国語、ハングルで文章を布に印刷し、それをパイロットの背中